

単身高齢者の暮らしにみる配食サービスの生かし方 A Way to Utilize Home Delivered Meals in Single Elderly Persons' Daily Lives

友永美帆

(桜美林大学 健康福祉学群)

野村知子

(桜美林大学 健康福祉学群)

杉澤秀博

(桜美林大学加齢・発達研究所)

要旨

本研究の目的は、単身高齢者が配食サービスをどのように生活に生かしているのか、利用開始からの変化も含め明らかにすることにある。分析対象であった配食サービスは調布ゆうあい福祉公社が提供するものであり、配食を通じて安否確認を行うことを積極的に進めていること、作り手と配達者として地域の住民が参加しているという特徴をもっていた。その配食サービスを4年以上利用している単身高齢者9名に、半構造化面接聴取法による調査を行った。分析方法はKJ法であった。分析の結果、以下の点が明らかとなった。第1に、食生活上のニーズの自覚とともに、他の配食サービスのメニューや配達方法への不満が当該配食サービスの利用開始のきっかけであったこと、第2に、食材やメニューの工夫、利用者の状況に合わせた配達方法の採用が配食サービスの継続利用に関係していたこと、第3に、継続利用を通じて配達者と日々関わることで自分が見守られていることを実感していたものの、配食サービスに対して直接的には見守り機能を期待していなかったこと。

キーワード：配食サービス、単身高齢者、安否確認、質的研究

1. 緒言

1) 研究の背景と目的

我が国は急速に高齢社会を迎え、65歳以上の単身高齢者の増加は男女ともに顕著であり、2010年には男性約139万人、女性約341万人、高齢者人口に占める割合は男性11.1%、女性20.3%となっている¹⁾。この単身高齢者においては、社会的孤立のリスクが高いことが問題となっている。

今後、単身高齢世帯等の増加に伴い、医療や介護サービス以外にも、在宅生活を継続する

ための配食・見守り等の日常的な生活支援を必要とする人の増加が見込まれる。厚生労働省においては、団塊の世代が75歳以上になる2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の構築を目指している²⁾。地域で行う配食・見守り等の日常生活支援活動は、国の地域ケアの方向性や単身高齢者のニーズに合致しており、それを支える社会基盤の整備を進める必要がある。

日常的な生活支援としての役割を担う配食サービスの効果として、食事確保や栄養改善の視点から客観的にその効果を評価した研究が見られる。たとえば、バランスのとれた配食サービスによる食事を回数多く食べ続けた人は長生きをし、身体機能の低下が抑えられている傾向があること³⁾、配食サービスの利用者は利用していない人と比較して栄養状態が良好であること⁴⁾を明らかにした研究がある。この2つ以外にも配食サービスの効果を明らかにした調査・研究^{5) 6) 7) 8)}は少なくない。しかし、配食サービスの付随的な機能とされる孤独感の解消、安否の確認の面⁹⁾から、その機能を実証的に明らかにした研究は少ない。配食サービスはその利用の直接的な目的は食事確保や栄養改善にある。それが安否確認や孤立感の解消というように多面的な機能を有効に発揮するようになるためには、利用者が配食サービスをどのように自分の生活に役立てているか、その背景も含めて明らかにする必要がある。しかし、利用者の視点から配食サービスがどのように生活に生かされているかを解明した研究はほとんどない。

厚生労働省が示した、2015年4月から実施される第6期介護保険事業計画における「介護予防・生活支援総合事業のガイドライン（案）」では、新たに創設される「その他の生活支援サービス」において、配食がとりあげられている。「栄養改善を目的とした配食や一人暮らし高齢者に対する見守りとともに行う配食など」とし、国は、配食サービスの主目的である食の提供だけでなく、二次的目的とされる見守りについても着目し、新事業に位置づけようとしている¹⁰⁾。したがって、栄養管理を中心としつつ、さらに孤独感の解消や安否確認など付加的な機能を使用しながら介護予防に配食サービスを活用している事例があるとすれば、それを対象とすることで、配食サービスを通じた介護予防・生活支援施策の推進に貢献することになる。

本研究の目的は、介護予防の一環として配食サービスを位置づけ、活動を展開している組織の利用者を対象に、利用者の視点からみて、単身高齢者が生活の中で配食サービスをどのように生かしているのか、利用開始からの変化も含めて明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 対象とする食事サービス事業

(1) 事業の概要

本研究では、調布ゆうあい福祉公社が提供する住民参加型食事サービスの利用者を対象とした。調布ゆうあい福祉公社は、介護保険等の公的制度では対応できないケースについて、会員制によって有料の在宅福祉サービスを提供している。その一環として食事サービスが1991年にスタートした。食事の作り手と配達者を住民が担うという住民参加型の形式をとり、365日1日2食、栄養バランスとともに季節の旬の食材を取り入れた手づくりの食事を提供している。配達方法は手渡しが原則になっているが、事前に留守などの連絡をもらった場合は公社で用意したボックスに入れる。手渡しの他にも、利用者の状態により配達者が居室内に上がり、食事が食べられるようにセットするテーブルセットという方法もある。配食数と配達方法については、公社の専従の保健福祉の専門相談員と利用会員本人との話し合いに基づき決定する。配達においては安否確認が行われる。配達者は公社専用の携帯電話を携帯しており、配達時に利用者が留守や異常がある場合は公社へ連絡する。配達者からの連絡を受けた公社は本人へ連絡を入れる。連絡がつかない場合は、緊急連絡先に連絡を入れる。日々の様子についても、配達者からの報告が食事担当職員から地区担当の専門相談員に伝えられ、必要があれば、地域包括支援センターの職員やケアマネジャーにつないでいる。以上の他、専従の保健福祉の専門相談員が利用会員一人ひとりを担当し、毎月1回程度、訪問ないし電話で生活健康相談を行っている。配達者が利用者の異変に気付いた場合、公社に連絡し職員が急行する。

(2) 事業の設立経過

松原¹¹⁾は、地域住民の連帯意識を基盤として、小規模でありながら全国に先駆けて単身高齢者に対する配食サービス事業を実施したという特色に着目し、調布ゆうあい福祉公社の設立過程を示している。それによれば、調布ゆうあい福祉公社の前身となる調布ホームヘルプ協会は1985年から活動を開始した。当時、調布市では、ひとり暮らし高齢者の食事の確保が問題視され、会食・配食等によるサービスが生まれたが、量的に不足していた。このような事態を目の前にし、高齢者問題に強い関心を持った調布市の主婦グループの私的会合が受け皿となり、メンバーの一人であった民生委員の呼びかけによって有償で介護・家事サービスを提供する「調布ホームヘルプ協会」が設立された。その後「調布ホームヘルプ協会」は「調布市在宅福祉事業団」となり、1990年に「財団法人調布ゆうあい福祉公社」が設立され、2012年に公益財団法人へ移行した。

(3) 対象とする理由

松原¹¹⁾は、この配食サービス事業は、食事配達を通じて参加者が利用会員の生活を支え

るという使命感を生み、利用会員の日々の生活を見守り、地域の高齢者のニーズを的確に把握する上でも大きな存在となったと指摘している。そして、配食サービスの意義について次のように述べている。単に人間の基本的欲求を満たすためという理由にとどまらない、①質が高くバランスのとれた食事を提供した利用者の「健やかな老後生活」の支援、②利用者家族による食事準備の支援、③利用者自身による総合的な健康管理への援助、④利用者の社会交流の促進や安全確認、⑤市民相互の連帯感の醸成、等の意義がある。以上のように、調布ゆうあい福祉公社が提供する住民参加型配食サービスは、食事確保や栄養管理に留まらない、質の高い食生活、社会的交流、見守りなどの機能を積極的に付加している。加えて、地域包括ケアの一翼を担う資源として期待されている住民を積極的に活用している。このような先進的な活動を行っている配食サービスの利用者を対象とすることで、利用者の側が食事確保や栄養管理以外の機能を受け入れ、自らの生活に生かすプロセスを解明できると考えたからである。

2) 調査対象者

調布ゆうあい福祉公社の配食サービスを利用し、家族構成が単身世帯で、会話が可能な方、利用年数は4年以上で、調査に協力してくれる方を対象とした。その結果、9名が対象となった。対象者の特性は表1に示した。対象者の年齢は79歳～93歳、配食サービスの利用年数は4年から13年（一時中断含む）であった。

3) 調査方法

半構造化面接聴取法による調査を行った。面接時間は1時間半から2時間程度で、インタビュー項目は、①利用のきっかけ、②公社の配食サービスを知った理由、③どのようなところが良いか、④配達者とのコミュニケーションはどのようにしているか、⑤安否確認をどのように捉えているか、⑥金額（1食750円）の捉え方、⑦公社の配食を選んだ理由、⑧公社の配食サービスに対する信頼感、⑨調布市の支援があることについて、⑩配食サービスを利用して変化したことはあったか、⑪相談員の訪問についての捉え方などであった。調査期間は、2011年3月より4月であった。

表1. 対象者の特性

| No. | 対象者 | 性別 | 年齢 | 要介護度 | 配食サービスの利用回数 | 利用期間 |
|-----|-----|----|-----|------|-------------|--------------|
| 1 | Aさん | 男性 | 89歳 | 未申請 | 毎日夕食 | 7年（一時中断を含む） |
| 2 | Bさん | 女性 | 86歳 | 要支援1 | 週2日昼食 | 5年（一時中断を含む） |
| 3 | Cさん | 女性 | 86歳 | 未申請 | 週5日昼食と夕食 | 8年 |
| 4 | Dさん | 女性 | 86歳 | 要支援2 | 毎日夕食 | 4年（一時中断を含む） |
| 5 | Eさん | 女性 | 92歳 | 要支援2 | 毎日夕食 | 8年（一時中断を含む） |
| 6 | Fさん | 女性 | 87歳 | 要支援2 | 週3日夕食 | 11年（一時中断を含む） |
| 7 | Gさん | 女性 | 80歳 | 要支援2 | 週3日昼食 | 9年（一時中断を含む） |
| 8 | Hさん | 女性 | 79歳 | 要介護3 | 週4日夕食 | 5年 |
| 9 | Iさん | 男性 | 93歳 | 要支援2 | 週6日夕食 | 13年（一時中断を含む） |

4) 分析方法

分析方法は、KJ法^{12) 13)}であり、面接内容をICレコーダーに記録した上で逐語録に起こし、分析を行った。KJ法は、混沌とした問題を整理し、問題解決に向けて方法を生み出す手法であり、グループ編成を重ね、全体構造を明らかにしていくものである。分析にあたっては、客観性を保つために、研究会での指導、協力を得て意見が一致するまで検討を行い、その妥当性を高めるよう努めた。

5) 倫理上の配慮

倫理上の配慮については、協力の得られた対象者に対して、研究の趣旨を口頭及び文書によって説明し、承諾書への署名を得た。音声は、対象者の同意を得て、ICレコーダーに録音した。録音媒体と逐語録については、執筆者の責任で厳重に管理した。本研究は、桜美林大学倫理委員会の承認(10044)を得たうえでを行った。

3. 結果

1) 単身高齢者による配食サービスの生活への生かし方の全体像

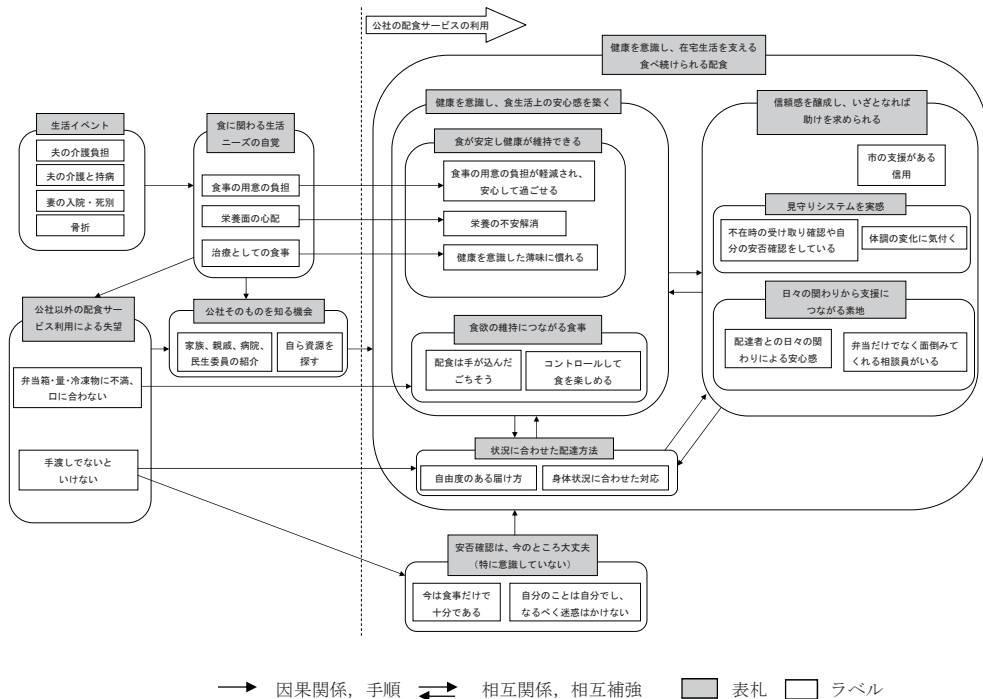


図 1. 単身高齢者による配食サービスの生活への生かし方の全体像

単身高齢者による配食サービスの生活への生かし方について、結果の全体像を図1に示した。なお、表札は【】、ラベルは《 》で表した。「 〃 」は発言例である。

配食サービスの利用の動機には、【生活イベント】を経験したことによる【食に関わる生活ニーズの自覚】が存在していた。このようなニーズが公社の配食サービスの利用に結びついたのは、【公社そのものを知る機会】があったこととともに、【公社以外の配食サービス利用による失望】があった。

利用開始後においては、【食が安定し健康が維持できる】【食欲の維持につながる食事】から生成された【健康を意識し、食生活上の安心感を築く】という食の保障、食事の質に対する評価、【状況に合わせた配達方法】という配達方法に対する評価、さらに、配食サービスの継続利用により、【日々の関わりから支援につながる素地】【見守りシステムを実感】という【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】という意識が生まれた。これらの表札を包括するとすれば、【健康を意識し、在宅生活を支える食べ続けられる配食】つまり公社の配食サービスを継続利用するということになる。配食サービスを通じた安否確認については、《今は食事だけで十分である》と直接的に期待を表明していなかった。しかし、《自分のことは自分でし、なるべく迷惑はかけない》というように、親族への遠慮があることから、配食サービスに対しては【健康を意識し、食生活上の安心感を築く】こととともに【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】という、すなわち、いざというときのセーフティネットとしての位置づけをしていた。

以下では、利用までのプロセスと利用して以降、配食サービスをどのように生活に生かしたのか、詳細を説明していこう。

2) 利用までのプロセス

配食サービスの利用の動機には、【生活イベント】があり、それを経験したことで【食に関わる生活ニーズの自覚】をするようになった。

【生活イベント】は、表2に示したように、①「便の臭いや介護疲れで食べられなくなり、自分の体重も減ってしまい入院した」という《夫の介護負担》、②「主人が生きていた頃、介護をしながら自分も糖尿病があり体調を崩した」という《夫の介護と持病》、③「妻が寝たきりになってしまい、その後他界した」という《妻の入院・死別》、④「圧迫骨折で半年間入院」などの《骨折》というように、今までの生活が維持できなくなる事態に直面することであった。

【食に関わる生活ニーズの自覚】には、表3に示したように、以下3つのラベルがあった。①《食事の用意の負担》であり、骨折や病気などさまざまな生活イベントにより、「もう、自分でつけれない。退院する前は日曜日だけは自分で買い物してやってたけど、もう、日曜日でも出られないからお願いするようになった」「(朝・昼は自分で作るが)三食はできない。私の時代は男子厨房に入らずだった。作る時間は短くても考えて次に移る段階が遅い。(他の事が)何もできなくなる」などの発言が該当する。②食材をバランスよく一人分作ることは困難な状況があり、偏った食生活になりがちであるという《栄養面の心配》であり、「何とか

栄養偏るといふか、(配食を)頼んだ方が安全かな、栄養のバランスのためにはその方がいいと思う」が発言例である。③糖尿病のため、カロリーが計算されている食事が必要だという《治療としての食事》であり、発言例は「I型糖尿病だから、1日で1,200kcalの計算で食べる。配食はちゃんとカロリーがついているでしょう」である。

以上のようなニーズが公社の配食サービスを利用するのに結びついたきっかけには、公社を知る機会があったこととともに、公社以外の配食サービスの利用経験があった。【公社そのものを知る機会】は、《自ら資源を探す》と《家族、親戚、病院、民生委員の紹介》の2つのラベルから生成された(表4)。

【公社以外の配食サービス利用による失望】については、食に関わる生活ニーズを自覚し、紹介などにより配食サービスを利用し始めるが、それに不満が生じ、配食サービスを渡り歩いた結果、現在の配食サービスへたどり着いたというものであった(表5)。その理由として、「いつかとおっていたお弁当まづかった。こんなお弁当箱でおみおつけは中で踊ってこぼれて、豆は公社と違ってできたものが入ってくる。あそこはおいしくない。それきり他のは欲しくなかった」「ほとんど冷凍で完全冷凍というのを2年ぐらいとったかな。完全に冷凍ばかり」などの《弁当箱・量・冷凍物に不満、口に合わない》、「手渡しでないといけない。面倒くさいし留守にできない、出かけられない」といった《手渡しでないといけない》という配達方法により、生活が縛られてしまうものであった。

表2. 生活イベント(表札)

| ラベル | 発言例 |
|---------|--|
| 夫の介護負担 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 便の臭いや介護疲れで食べられなくなり、自分の体重も減ってしまい入院した ・ 夫が入院し、次々病気になった(夫の介護) |
| 夫の介護と持病 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 主人が生きていた頃、介護をしながら自分も糖尿病があり体調を崩した。 ・ 腰椎すべり症で入院したり、自宅で低血糖で倒れて肋骨にひびが入り治療している。 ・ 糖尿病で入院。脊柱管狭窄症もある。自宅で夫の介護もしていた(現在は他界)。 |
| 妻の入院・死別 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 妻が寝たきりになってしまい、その後他界した ・ 家内が亡くなった |
| 骨折 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 突然転んで左大腿骨を骨折。腰もその後圧迫骨折になり2カ月入院。それまでは自分でできていた。 ・ 圧迫骨折で半年間入院 ・ 転んで骨折したときの後遺症で家事困難。心臓病がある |

表 3. 食に関わる生活ニーズの自覚 (表札)

| ラベル | 発言例 |
|----------|--|
| 食事の用意の負担 | <ul style="list-style-type: none"> ・ もう、自分でつくれない。退院する前は日曜日だけは自分で買い物してやってたけど、もう、日曜日も出られないからお願いするようになった。 ・ (朝・昼は自分で作るが) 三食はできない。私の時代は男子厨房に入らずだった。作る時間は短くても考えて次に移る段階が遅い。(他の事が) 何もできなくなる。 ・ 1人分つくるのも大変。 ・ 自分で何かやるのが嫌になった。何でも面倒で本当にこんなに面倒になるものかと思うぐらい面倒になる。お昼は残り物で済ませる。 |
| 栄養面の心配 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 1食でも管理されたものをいただいたほうが、栄養的にもバランスがとれる ・ 何となく栄養偏るというか、(配食を) 頼んだ方が安全かな、栄養のバランスのためにはその方がいいと思う |
| 治療としての食事 | <ul style="list-style-type: none"> ・ I型糖尿病だから1日で1, 200kcalの計算で食べる。配食はちゃんとカロリーがついているでしょう。 ・ 自分で食べていると、どうしても好きなものだけ食べてしまう。味も(自分は)辛口だからかえてこういうお弁当の味のほうがいいのかと思う。カロリーとかそういう面でも、糖尿があるから安心。 |

表 4. 会社そのものを知る機会 (表札)

| ラベル | 発言例 |
|------------------|---|
| 自ら資源を探す | <ul style="list-style-type: none"> ・ 市報か何かを見て自分で申し込む。 |
| 家族、親戚、病院、民生委員の紹介 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 娘が市役所へ相談し配食利用開始。 ・ 孫が面倒見のいい子で、それで会社に連絡してくれて、いろいろ申し込んでくれた。 ・ 息子の嫁の祖母がお世話になったことがある(息子の嫁の紹介) ・ 夫の入院時、親戚より「とてもいいお弁当がある」と紹介される。 ・ 糖尿病で入院時、食事コントロールのため、紹介される ・ 心臓病や骨折にて日常生活困難になり民生委員の紹介で配食開始 |

表 5. 会社以外の配食サービスに対する失望 (表札)

| ラベル | 発言例 |
|---------------------|--|
| 弁当箱、量、冷凍物に不満、口に合わない | <ul style="list-style-type: none"> ・ いつかとっていたお弁当まずかった。こんなお弁当箱でおみおつけは中で踊ってこぼれて、豆は公社と違ってできたものが入ってくる。あそこのはおいしくない、それきり他のは欲しくなかった。 ・ あそこのは何となく、味は上品な味だけど、量も少ないし、交代でとっていたけど面倒だからやめて公社一本にした。公社のほうが食事も庶民的というか私の口に合う。 ・ 普通の配食はほとんど冷凍で完全冷凍というのを2年ぐらいとったかな。完全に冷凍ばかり。 |
| 手渡しでないといけない | <ul style="list-style-type: none"> ・ 冷凍物ばかりの弁当から取りかえたら、今度は手渡しでないといけない。面倒くさいし留守にできない、出かけられない。そんなことで確認するという、余りうるさくてしょうがないからやめた。 |

3) 利用開始後の継続利用

会社の配食サービスの利用について、【健康を意識し、食生活上の安心感を築く】【状況に合わせた配達方法】【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】という表札が生成され、最上位の【健康を意識し、在宅生活を支える食べ続けられる配食】という表札にまとまった。

【食が安定し健康が維持できる】については、表6に示したように、《健康を意識した薄味に慣れる》《栄養の不安解消》《食事の用意の負担が軽減され、安心して過ごせる》という3つの下位のラベルが統合されて生成された。《健康を意識した薄味に慣れる》とは、「割合に濃い方が好きだからちゃんとやっただきさっている味はとても薄いと感じる。今はそれに自分が慣れたんだろうと思ひ、そんなに苦にならず、おいしくいただいている」などと濃い味を好んでいたが薄味に慣れていく、「やっぱり会社のほうがいい。(他の配食は)お弁当屋さんのお弁当で味が濃くて量が少なかった」など会社の薄味に慣れるという発言から生成された。《栄養の不安解消》とは、「バランスがとれていて本当にいい」、《食事の用意の負担が軽減され、安心して過ごせる》とは、「これだけ自分で作るのは大変」「今日はお昼は何もしなくていい、手つかずでいただけるという安心感。一食だけでも考えないで済む。そういう日は本当に必要」という発言から生成された。

【食欲の維持につながる食事】については、「味もいいしまめにつくって手が込んでいる。普通では食べられない。お金出しても食べられない。本当に楽しみ」「月・木で配食していただくと、本当にご馳走をいただくという感じ。(弁当以外の食事は)残りを温めて、本当に自分で作って食べるものとは雲泥の差」「本当に最高。それが一番の楽しみ」「とても満足でおいしくいただいている。ずっと、生かされているうちはいただきたい」というように、手が込んだ料理は自分では作ることができないことから、会社の配食に対して、《配食は手が込んだごちそう》という評価がなされていた。「回転すしを食べに行き、好きなものも食べる」「食べたいものは自分で作る。向こう(配食)で出ないものは、自分で買えばいい」「配食は私にとっての安全弁。お弁当がある日とない日で好きなように自分でコントロールしている」など、中食や外食を利用したり好きなものも食べ、同時に配食も利用することで、《コントロールして食を楽しめる》という評価もなされていた。以上を統合して【食欲の維持につながる食事】という表札が生成された。

表 6-1. 健康を意識し、食生活上の安心感を築く（表札）

| 表札 | ラベル | 発言例 |
|---------------|------------------------|---|
| 食が安定し健康が維持できる | 食事の用意の負担が軽減され、安心して過ごせる | <ul style="list-style-type: none"> ・ これだけ自分で作るのは大変。自分で買って来たって無駄が出る。それを考えたら安い。 ・ 自分ではできないから、感謝と感激しかない。何種類もすべて必ず手を加えていて感心している。 ・ 始終いただきつづけてるのがいい。始終いただいて、何となくいただいて、安心して待ってられる。信頼できる。だから、長くひっきりなしに続いて楽しみにしている。 ・ 雨が降ろうが、雪が降ろうが、心配なく運んでくれるし、味もちゃんと考えてつくってくれるから安心。材料も（震災で）大変なときもちゃんとやってくれて感謝している。 ・ 夕食は絶対来るから心配しなくてもいい、考えなくていいという（安心感）。 ・ 今日はお昼は何もしなくていい、手つかずでいただけるという安心感。一食だけでも考えないで済む。そういう日は本当に必要。 |
| | 栄養の不安解消 | <ul style="list-style-type: none"> ・ とってもいい食事、私にはぴったり合ったバランスのとれたいい食事をずっと4年間いただいている。塩分控え目、油も少な目、重箱にちゃんときれいに入っている。味はもう言うことない。 ・ バランスがとれていて本当にいい。 |
| | 健康を意識した薄味に慣れる | <ul style="list-style-type: none"> ・ 血圧が高く血圧の薬を飲んでいる。塩分や1日のカロリーと量が決まっているため私にぴったり。 ・ これ（配食）がなかったらこんなに健康ではいられないと思う。油や塩分が多く自分でカロリー計算などせずいい加減にしていると思う。会社の食事をいただくことは健康上いいと思っている。 ・ 割合に濃い方が好きだからちゃんとやったださっている味はとても薄いと感じる。今はそれに自分が慣れたんだろうと思い、そんなに苦にならず、おいしくいただけている。 ・ やっぱり公社のほうがいい。（他の配食は）お弁当屋さんのお弁当で味が濃くて量が少なかった。 ・ コンビニは値段的に安いかもしれないけど味が慣れてないから公社の味なら安心して食べられる。 |

表 6-2. 健康を意識し、食生活上の安心感を築く (表札)

| 表札 | ラベル | 発言例 |
|--------------|---------------|--|
| 食欲の維持につながる食事 | 配食は手が込んだごちそう | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今日(昼(公社のデイ)と夜(配食)は公社の食事を食べられるから楽しみ。昨日は金目鯛と豆煮がおいしかった。あんまりおいしいからもっとご飯食べたと思った。 ・ 材料を使ってこれだけ自分では作れないから高いとは思わない。煮物やいろいろ入って、お魚も焼いただけでなくその上に甘みそを塗ってシシトウが乗っていたし、必ず野菜の葉とか敷いて、酢の物や果物がついていた。いつか安いまずい食事をいただいたことを思えば高いと思わない。 ・ 月・木で配食していただくと、本当にご馳走をいただくという感じ。(弁当以外の食事は)残りを温めて、本当に自分で作って食べるものとは雲泥の差、いろいろちゃんとしてよくできている。 ・ とっても満足でおいしくいただいている。ずっと、生かされているうちはいただきたい。 ・ 料理は味が良くて本当においしい。おかずはおいしく食べている。本当に最高。それが一番の楽しみ。息が切れてしまえば、もう食べたくても食べられないから息が出ている限りは食べたい。 ・ いい食事で本当に手をかけていて、ととても自分ではできない食事。大みそかまで持ってきてもらっていい食事が来た。ちゃんとお節の料理が、今年も去年の暮れも1日も休まずに。 ・ あれ(他社の配食)は値段は安かったけど、あれよりははるかに上等で大満足。 ・ 味もいいし、いろいろなものが入っていてやっぱり家庭の味。お弁当屋さんのお弁当とは違う。 |
| | コントロールして食を楽しむ | <ul style="list-style-type: none"> ・ たまにはおそばやおすしも食べたい。自分で好きなものを食べられるように水・日曜は(配食)はお休みにしている。 ・ 回転すしを食べに行き、好きなものも食べる ・ 食べたいものは自分で作る。向こう(配食)で出ないものは、自分で買えばいい。自分で作る時は多めに作って知り合いや近所へおすそわけ。喜んでくれる。 ・ (配食だけでは)間に合わないから何か作るが、立っているのも腰が痛くなり、一遍にはできない。 ・ お弁当のおかずだけでなく、自分でも作る。残った分は冷蔵庫へ入れてチンして夜食べる。 ・ 自分で作るのは面倒だけど、頭の体操のために栄養価を考え作っている。すべて配食でなく、自分でやれば少し頭の刺激になると思うが、一人分作るのは大変。 ・ 配食は私にとっての安全弁。お弁当がある日とない日で好きなように自分でコントロールしてる。 |

配達方法については、表7に示したように、【状況に合わせた配達方法】であるとの評価をしていた。「いないときはボックスを出しておくから(外出するとき)不便と感じることはない」「今までも保冷箱出し忘れたり帰るつもりが帰れなかったときも、ちゃんと入れていってくれる。事後確認は来るし、安心して任せきっている」というように、《自由度のある届け方》で対応されること、「今は要支援に戻ったが、要介護だったときはちゃんとここ(テーブル)まで運んでくれた」という、そのときの《身体状況に合わせた対応》により助かった経

験が語られていた。以上、配食に際して【状況に合わせた配達方法】がなされていた。

表 7. 状況に合わせた配達方法（表札）

| ラベル | 発言例 |
|-----------------|---|
| 自由度のある 届け方 | <ul style="list-style-type: none"> ・留守をするかもしれないから箱を借りておき、入れておいてもらう。帰るとちゃんと置いてある。 ・出かける時はお弁当を箱の中に入れてもらうように電話する。電話を忘れて出かけたこともある。 ・いないときはボックスを出しておくから（外出するときに）不便と感ずることはない。 ・今までも保冷箱出し忘れてたり、帰るつもりが帰れなかったときも、ちゃんと入れていってくれる。事後確認は来るし、安心して任せきっている。 |
| 身体状況に合わせ た対応 | <ul style="list-style-type: none"> ・今は要支援に戻ったが、要介護だったときはちゃんとここ（テーブル）まで運んでくれた。今はもう玄関で受け渡しで半年しか要介護ではなかったが、台所に温め直しに行くにしても、全部持っていかないで済むから、楽だった。 |

4) 食事以外でも支えられていることを認識

継続利用することで、食事以外でも支えられているという意識をもつようになった。それは【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】であり、この上位の表札は、【日々の関わりから支援につながる素地】【見守りシステムを実感】に《市の支援がある信用》というラベルが加わり、生成された。

【日々の関わりから支援につながる素地】については、表8に示したように、《配達者との日々の関わりによる安心感》《弁当だけでなく面倒みてくれる相談員がいる》というラベルから生成された。「大分長いから顔見知りまではいかないけど、会社の人だというのはわかるから、それが長く続けている理由にもなる」や、「少しボケが始まってしまい、自分がわからない経験。いつどういことが起こるかかわからない（怖さがある）。息子は毎日顔を出すわけではないため、会社は毎日一回は来るから（自分を見ていて）助かっている」というように、《配達者との日々の関わりによる安心感》が、決まった日に定期的に配達者が訪問することで生まれていた。加えて、「（相談員の方は）親切にしてくれて、お弁当だけいただいているのに、福祉の面倒してくださるんだなと思って、いろんな世間話はする。でも、何か面倒してくださるんだという頭はある」「（相談員は）特に事務的でもないし、だけどすごく親しみ感じるし、拒否感とかもう一寸もない」という《弁当だけでなく面倒みてくれる相談員がいる》ことから、拒否感を持たずに受入れられるようになり、【日々の関わりから支援につながる素地】が形成されていた。

【見守りシステムを実感】は、《体調の変化に気付く》《不在時の受け取り確認や自分の安否確認をしている》というラベルから生成された。《体調の変化に気付く》は、「配達者がいつもとは違う自分に気づき、後で（相談員が）『大丈夫ですか』と電話をくれる。心配してくれて親切でありがたい」といった発言から生成された。《不在時の受け取り確認や自分の安否確

認をしている》は、「不在時には後で確認の連絡がある。対応がソフトで丁寧、信頼感がある。保冷箱を出し忘れても保冷箱に入れてくれる。コンビニで買うと値段的には安いかもしれないが、安心感がない」「知らない人には何も頼まない。電話でもわかりませんと言って切る。玄関には人を入れないように注意している。振り込み詐欺やいろいろな怖いから。食事は毎日来て、私の安否確認をしてくれていると思うことがある」「(相談員)がこの間も地震があったらすぐに飛んできたから、ありがたいと思う」という発言がその例である。

さらに、《市の支援がある信用》というラベルについては、「調布市の支援があるから、できると思う。職員の人、配食とか、普通のお弁当屋さんというような感覚ではない。安心しているし、いいところを教えてもらったと思う」「公的なものが入っているから信頼できる。利益中心でなくて、安いお弁当買おうと思えば、300～400円でも買えるだろうけれど、配達つきで、保障つきで、すごい助かっている」というように、この配食サービスに対する信用の一部は市の支援があるということと関係していた。

表 8-1. 信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる (表札)

| 表札 | ラベル | 発言例 |
|-------------------|---------------------|---|
| 日々の関わりから支援につながる素地 | 配達者との日々の関わりによる安心感 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 少しボケが始まってしまい、自分がわからない経験。いつどういことが起こるかわからない(怖さがある)。息子は毎日顔を出すわけではないため、公社は毎日一回は来るから(自分を見ていて)助かっている。 ・ 家に知らない人がお金欲しいと入ってきて怖いからお金を渡したことがある。去年は違う人が3回。(配達の方が来るという)安心感がある。 ・ 配達のとときに玄関に「入浴中」と札をかけている。冗談を言う配達者がいておもしろい。 ・ 誰も来ないからいろんな方が来て楽しみにしている。 ・ 曜日によって違うから顔見知りもいて今日はだれかしらと待っている。 ・ 運んでくれたついでに洗濯物を入れてもらい、用がある時は快くやってくれ助かる。男の人は力仕事頼むのに一番いい。 ・ 大分長いから顔見知りまではいかないけど、会社の人だというのはわかるから、それが長く続けている理由にもなる。 ・ 配達や調理してくれる人はボランティア精神がないとできないことだし安心感がある。(他と)比べようとも思わない。 ・ 配達はよく知っている人、ほかのことで知り合いの人が来る。ボランティアだから来てくれてありがたい。 |
| | 弁当だけでなく面倒みられる相談員がいる | <ul style="list-style-type: none"> ・ (相談員の方は)親切にしてくれて、お弁当だけいただいているのに、福祉の面倒してくださるんだなと思って、いろんな世間話はする。でも、何か面倒して下さるんだという頭はある。 ・ 来てくれた人が、ずーっと安心の人ばかり来てくれる ・ (相談員は)特に事務的でもないし、だけどすごく親しみ感じるし、拒否感とかもう一寸もない。 ・ やっぱね、Bさん(相談員)も面倒見がいいから。 |

表 8-2. 信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる (表札)

| 表札 | ラベル | 発言例 |
|------------|-------------------------|--|
| 見守りシステムを実感 | 体調の変化に気付く | <ul style="list-style-type: none"> 配達者がいつもとは違う自分に気づき、後で(相談員が)「大丈夫ですか」と電話をくれる。心配してくれて親切でありがたい。 |
| | 不在時の受け取り確認や自分の安否確認をしている | <ul style="list-style-type: none"> 不在時には後で確認の連絡がある。対応がソフトで丁寧、信頼感がある。保冷箱を出し忘れても保冷箱に入れてくれる。コンビニで買うと値段的には安いかもしれないが、安心感がないし、買いには行かれない。 留守の時もアフターケアがあるから、安心していただいている。 地震のすぐ後電話があった。安心感がある。だから、食事はずっと永久に生きている間とるつもり。(食事担当から)時々電話もあるし、手紙は来るし、安心している。 (相談員)がこの間も地震があったらすぐに飛んできたから、ありがたいと思う。 知らない人には何も頼まない。電話でもわかりませんと言って切る。玄関には人を入れないように注意している。振り込み詐欺やいろいろ怖いから。食事は毎日来て私の安否確認をしてくれていると思うことがある。 安否確認に来てくれているという意識はある。長い方もいて、顔見ると会社の方だとわかる。 |
| | 市の支援がある信用 | <ul style="list-style-type: none"> 市の支援があるということは信用があるということ。だから安心。 会社に全幅の信頼をしている。働いている方たちも大丈夫と感じる。偏った見方かもしれないが、民間には頼れない。 調布市の支援があるから、できると思う。職員の人、配食とか、普通のお弁当屋さんというような感覚ではない。安心しているし、いいところを教えてもらったと思う。 公的なものが入っているから信頼できる。利益中心でなくて、安いお弁当買おうと思えば、300～400円でも買えるだろうけれど、配達つきで、保障つきで、すごい助かっている。 |

以上のように、【健康を意識し、在宅生活を支える食べ続けられる配食】は、【健康を意識し、食生活上の安心感を築く】という食生活の安定、【状況に合わせた配達方法】、さらに、配達者、相談員との関わりや市の支援により【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】が包括されたものであることが明らかとなった。

5) あまり意識されていない安否確認

対象者にとっては、【安否確認は、今のところ大丈夫(特に意識していない)】ということであった(表9)。これは、2つのラベルで構成されている。そのラベルの一つには、「本当にいつもおいしいのを食べられる。(安否確認という意味では)あんまりそういうのはいい、別に、もう今で十分」というように、安否確認への期待というよりは《今は食事だけで十分である》ということであった。加えて、「会社はお弁当、相談は子供たちに、病気のことはケアマネジャーに、自分で利用できるものは利用して、(家族に)なるべく迷惑かけないようにする」「(安否確認については)別に何も感じない。(安否確認への期待は)そういうことはない。やっぱり自分のことは自分の責任だから」というように、自分の生活を維持するために家族や周り

には《自分のことは自分でし、なるべく迷惑はかけない》ように心がけていた。

表 9. 安否確認は今のところ大丈夫 (表札)

| ラベル | 発言例 |
|------------------------|--|
| 今は食事だけで十分である | <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全確認っていう勤めがあるらしく、話をしようという形で来る。相手に合わせて適当にやっている。一人暮らしで年をとると聞きかないことがあるから、ボケのためにいいかと思うが、そのために利用しようという気はない。 ・ そんなに頻繁でなくても、用があれば電話するから、顔を出さなくても電話で「大丈夫ですか」と聞いてくれれば、それでいい。(安否確認への期待は)今のところない。 ・ (相談員の方に相談は)別に…もう食事だけで。 ・ 本当にいつもおいしいのを食べられる。(安否確認という意味では)あんまりそういうのはいい、別にもう今で十分。 |
| 自分のことは自分でし、なるべく迷惑はかけない | <ul style="list-style-type: none"> ・ (安否確認については)別に何も感じない。(安否確認への期待は)そういうことはない。やっぱり自分のことは自分の責任だから。(と言いつつも相談員が地震のときに駆けつけてくれ嬉しいと経験を話す) ・ 私はもうどこでどんな死に方をしてもいい。昔はみんな家で看取った。私はそのまま生き返らせないで地震でつぶれたらそれでいい。 ・ 公社はお弁当、相談は子供たちに、病气的なことはケアマネジャーに、自分で利用できるものは利用して、(家族に)なるべく迷惑かけないようにする。 |

4. 考察

1) 利用開始の契機になるもの

本研究の目的は、利用者が配食サービスをどのように自分の生活に役立っているかについて利用者の視点から明らかにすることであった。本研究では、公社の配食サービスの特徴が利用開始に影響していることが示唆された。利用の開始にあたっては、《食事の用意の負担》《栄養面の心配》《治療としての食事》という【食に関わる生活ニーズの自覚】があり、そのニーズの発生には【生活イベント】が影響していた。配食サービスの目的や効果が食の確保や栄養状態の改善にあることからすれば、以上の結果は当然のことと思われる。しかし、同時に、【公社そのものを知る機会】【公社以外の配食サービス利用による失望】も配食サービスの利用のきっかけとなっていた。【公社以外の配食サービス利用による失望】については、具体的には、メニュー、配達方法などに対する不満であり、このような不満をもった住民の受け皿として公社の配食サービスが機能していることを示唆している。さらに、【公社そのものを知る機会】についても、通常考えられる機会とは異なるものであった。それは、病院のスタッフや民生委員からの紹介である。配食サービスを提供している公社は、配食サービスに留まらず、日常生活や健康上の悩みなどについて、相談員が訪問や電話で相談に応じているなど総合的な在宅福祉サービスの提供拠点としても機能している。このような公社の活動全体が、地域の医療や福祉の関係者から評価された結果として、配食サービスの紹介へと結びつたとみることができよう。

2) 利用継続に必要なもの

本研究では利用継続するために配慮すべき点についても、重要な知見が得られていた。配食サービスを通じて食の確保や栄養状態の改善を図るには、利用開始だけでなく、その後の継続的な利用が不可欠となる。これまでの研究では、継続的な利用がどのような要因によって支えられているかについては、ほとんど検討されてこなかった。本研究では、【健康を意識し、在宅生活を支える食べ続けられる配食】という最上位の表札が生成され、その構成要素の中に継続のための重要なヒントが含まれていた。その一つは、【状況に合わせた配達方法】という配食方法の工夫であった。公社の配食サービスを開始した理由として、【公社以外の配食サービス利用による失望】があり、その1つに配達方法に対する不満があった。公社の配食サービスは、この問題へ意識的に対応を図る工夫をしていた。不在時の受け渡し方法については、自治体が行う配食サービスなどでは、安否確認、衛生面の安全性の確保の観点から手渡しを原則としている場合が多い。しかし、そのことに対して「利用者としては、配食時、留守にしていると食事を持ちかえられてしまうため、食事を受け取るまで外出ができなくなる。外出を制限されるような状況になり、より不健康になる要因が発生し配食サービスを受けることに不満を感じる」といった指摘がなされている⁹⁾。公社の配達方法は、手渡しが原則になっているが、留守などの連絡を事前にした場合は食事は用意したボックスに入れられる、身体的に障害の重い人については、配達者が居室内に上がり、食事が食べられるようにセットするテーブルセットをするなど、利用者の都合に合わせて《自由度のある届け方》や《身体状況に合わせた対応》も行っている。さらに、【食欲の維持につながる食事】も重要な構成要素として位置づけられていた。具体的には、《配食は手が込んだごちそう》《コントロールして食を楽しめる》という食欲を維持することが可能な食事のメニューの用意であった。医学的な視点からみて必要な栄養素を含む食事が提供されても、見た目がおいしくない、味がまずい、つまり食事を楽しむことができないようなメニューであるならば、その配食サービスを継続して利用することは難しく、健康の維持にも役立ちにくい。本研究の知見は、配食サービスは日常生活そのものの営みを補完するもので、継続的に利用することが必要なものであるからこそ、栄養のバランスや減塩などの医学的な対応に配慮しながらも、食そのものを楽しむことができるようなメニューの工夫が必要であることが示唆されている。

3) 利用継続の結果としての見守り・安否確認

本研究では、見守りを一つの目的として配食サービスの利用を促したとしても、それによって配食サービスの利用が促されない、さらに配達する人との信頼関係が形成されない場合には見守りが有効に機能しないことが示唆された。配食サービスによる見守りや安否確認については、《今は食事だけで十分である》とし、それが必要であると表明した人は対象者の中にはいなかった。《自分のことは自分でし、なるべく迷惑はかけない》というように、娘や息子（親族）や周囲の人に対しては、それぞれの生活があり、負担はかけられないという遠慮があった。

単身高齢者であることを客観的に判断すれば、配食サービスを利用して見守りや安否確認をしてもらった方が利用者にとっては安心できると思われるが、本人自らがそれに対する要望を表明した人はいなかった。それはなぜなのであろうか。「(安否確認については)別に何も感じない。(安否確認への期待は)そういうことはない、やっぱり自分のことは自分の責任だから」との対象者の発言から読み取るとすれば、自分の安否の確認まで他人の世話になることへの抵抗や、管理されることへの抵抗があると思われる。このような利用者の心情を考慮するならば、配食サービスを利用するか否かは別にして、安否確認の必要性を真正面から訴えても、それを受け入れる高齢者は少ないであろう。本研究で明らかにされたように、本人が見守りや安否確認が必要と意思表示しなくても、結果として、【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】というセーフティネットとして機能するような配食サービスが一つのモデルとなるのではないと思われる。

このようなセーフティネットとして機能するには、どのような条件が必要なのであろうか。【健康を意識し、在宅生活を支える食べ続けられる配食】の構成要素をみると、配食サービスの直接的な目的である食の確保と栄養管理について、【健康を意識し、食生活上の安心感を築く】という点で評価がなされていた。加えて興味深いのは、【信頼感を醸成し、いざとなれば助けを求められる】を構成する【日々の関わりから支援につながる素地】と【見守りシステムを実感】であった。【日々の関わりから支援につながる素地】については、配達者が単に食事を配達するのではなく、利用者の社会的なネットワークの重要な一部となり、孤立防止に貢献していること、その前提として利用者との信頼関係が形成されていた点である。《見守りシステムを実感》については、いつもと様子が違うなど自分が気づかない体調の変化などに、配達者や相談員が気づき、声掛けをしてくれたことなどを指している。配食サービスの内容そのものと同時に、配達者や公社の保健福祉専門職との信頼関係が大きな役割を果たしていることが示唆された。すなわち、このような信頼関係の築きにより、利用開始以降の変化として、食事だけでなく、いざとなれば助けを求められるというサービスの付加的な機能を受け入れる受容的な態度が形成されたことが示唆された。

利用者の側から見た公社の配食サービスの利用継続やその効果の発揮には、公社の保健福祉専門職と担い手となっている住民との連携が欠かせない。担い手としての住民は、料理の作り手と配達者として大きな役割を担っている。食事には、管理栄養士と作り手である住民が協力し、その創意工夫によって栄養バランスに配慮するだけでなく季節の旬の食材を取り入れた手づくりの食事を提供している。担い手である住民は、同じ住民という立場で当事者性をもって関わり、利用者の目線から、栄養バランスのとれた食事作りと配達することの意味を理解し、日々の関わりから利用者との信頼関係を築いている。利用者もまた、住民がボランティア精神で食事を届けに来てくれているという安心感と感謝の気持ちがある。このように住民の力を活用することは、安価にサービスを提供するという効率性のみでなく、住民相互の助け合いによる信頼関係を築き、地域のネットワークを構築し、地域の相互扶助力を高める役割を果たしている。併せて、利用者にとって公社の配食サービスを利用する効果が

発揮されるのは、住民の力だけではなく、住民と保健福祉専門職の密接な連携による継続的な支援があるからこそである。相談員は利用者一人ひとりを担当し、継続的に、定期的に利用者の生活と健康を見守っている。配達者である住民が利用者の体調の変化に気づき、相談員へ報告し、相談員から利用者へ体調確認の連絡をする。利用者は、配達後に相談員から連絡があったことを見守られていることを実感し、信頼感が醸成されていくことが明らかになった。以上のように、住民と専門職との連携によって、利用者の状況に合わせた対応が可能になり、利用継続やその効果が発揮され、孤立防止や見守りとして機能できる点で大きな意義をもつことが示唆された。

4) 本研究の限界と課題

第1に、配食サービスの継続利用者のみを対象とした点である。継続利用者は公社が提供する配食サービスに対して肯定的な評価をしている人が多いであろう。だからこそ、継続利用していると思われる。今後は、利用中止に至った利用者に対する調査を行うことで、本研究で明らかにされた知見の妥当性を検証する必要がある。第2には、本研究の知見を他の配食サービスに単純に普遍化することが危険である点である。本研究で対象とした配食サービスは、調理、配食に住民ボランティアが関わっており、さらに相談員が定期訪問するなど他の保健サービスの提供も行われている。このことが、利用継続やセーフティネットとして機能することに貢献していた可能性が高い。第3には、効率性の評価を行っていない点である。公社の配食サービスは、利用者の自己負担額が1食750円である。配食サービスに限定しても市からの補助がない場合には、この金額では提供することはできない。加えて、相談員の定期訪問など他のサービスの提供も合わせて行われていることを考えるならば、その効果との対比でどの程度の費用がかかるのかを検討する必要がある。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査に快くご協力くださった調布ゆうあい福祉公社のご利用者様、職員の方々に深く感謝いたします。本研究は平成22年～23年度において厚生労働省科学研究費補助金を得て行われた研究（「食を通して支え合うコミュニティづくり」研究代表者 野村知子）である。

文献

- 1) 内閣府：平成25年版「高齢社会白書」
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/gaiyou/s1_2_1.html
- 2) 厚生労働省：地域包括ケアシステム
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
- 3) 野村知子・杉澤秀博・高橋恵美子：配食サービスが高齢者の余命・日常生活自立度に与える影響に

- 関する研究－9年間の追跡調査から. 老年社会科学, 30(2):262 (2008).
- 4) 酒元誠治・古家隆・堀之内恭子ほか：配食サービスの有無別独居高齢者の栄養状態. 日本公衆衛生雑誌, 51 (8) :631-640 (2004).
 - 5) 野村知子・高橋恵美子・加藤登志雄ほか：配食サービスの効果に関する研究. 老年社会科学, 23(2):225 (2001).
 - 6) 奥野和子・三橋喜久・安武幸恵：ひとり暮らし老人の食物摂取の習慣および健康状態に及ぼす食事サービスの効果. 栄養学雑誌, 47 (4) :179-188 (1989).
 - 7) 社会福祉法人 東京都社会福祉協議会：食の福祉的支援に関する調査研究報告書 食の福祉的支援在宅高齢者や障害者のくらしを支えるために. 5-14, 大東印刷工業, 東京 (2007).
 - 8) 松井順子：地域類型でみた大阪府各自治体の配食サービス事業. 社会福祉学, 52(1):83-95 (2011).
 - 9) 社団法人シルバーサービス振興会：配食サービス従業者研修用テキスト－食事の宅配サービスにかかわるすべての人に－. 85-90, 中央法規出版, 東京 (2006).
 - 10) 厚生労働省：介護予防・日常生活支援総合事業のガイドライン (案)
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/0000052670.pdf>
 - 11) 松原日出子：在宅福祉政策と住民参加型サービス団体－横浜市ホームヘルプ協会と調布ゆうあい福祉公社の設立過程－. 第1版, 105-151, 御茶の水書房, 東京 (2011).
 - 12) 川喜田二郎：発想法 創造性開発のために 83版, 65-114, 中央公論新社, 東京 (2008).
 - 13) 川喜田二郎：続・発想法 KJ法の展開と応用 59版, 48-98, 中央公論新社, 東京 (2010).

A Way to Utilize Home Delivered Meals in Single Elderly Persons' Daily Lives

Miho Tomonaga

(College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University)

Tomoko Nomura

(College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University)

Hidehiro Sugisawa

(Institute of Aging and Development, J. F. Oberlin University)

Keywords: Home delivered meals, Single elderly persons, Safety check, Qualitative research

The purpose of this research is to reveal the use of home delivered meals in single elderly persons' daily lives and the changes from the start of usage. We selected the home delivered meals provided by Chofu Yuai Welfare Corporation as a research field. This organization has confirmed the safety of the elderly persons while delivering their meals. One of its features was the attendance of the residents as cooks and distributors. Semi-structured interviews were conducted with nine single elderly persons who had been using the service for over four years. The KJ analysis method was used. The analysis results showed the following. First, the various motivations to use the home delivered meals of Chofu Yuai Welfare were related to not only the self-awareness of eating habits but also complaints about the menus and distribution methods of other home delivered meals. Second, ingredients, menu plans, and the adoption of distribution methods which were suitable to the users were related to the continuous usage of the home delivered meals. Third, although respondents felt that they were watched out for by the distributors during continuous usage, they would not expect a watching function directly from the home delivered meals.